

〔本朝世紀〕久安五年四月十六日丁卯、近日於一院有如法大般若經一部書寫事、卿士大夫男女素縉多營之、此事是則駿河國有一上人、號富士上人、其名稱未代、攀登富士山已及數百度、山頂構佛閣、號之大日寺、

○按ズルニ、富士行者ノ事ハ、神祇部神道篇富士講ノ條ニモ見エタリ、

〔更科日記〕是よりは駿河の國なり、○中富士の山はこの國也、我生出し國にては、にしもてにみえし山なり、その山のさま、いと世に見えぬさまなり、さまことなる山のすがたの、紺青をぬりたるやうなるに、雪のきゆる世もなくつもりたれば、色こき衣に、白きあこめきたらんやうに見え、山のいたゞきのすこしたひらぎたるより、げぶりは立のぼる、ゆふぐれは火のもえたつもみゆ、

〔十六夜日記〕廿六日暮か、るほどきよみが關をすぐ、○中富士の山を見れば、煙もたゝず、むかし父の朝臣にさそはれて、いかになるみの浦なればなどよみしころ、とほつあふみの國まではみしかば、富士のけぶりのすゑも、あさゆふたしかにみえしものを、いつの年よりかたえしととへばさだかにこたぶる人だになし、

たが方になびきはて、か富士のねの煙の末のみえずなるらん、古今の序のことばまでおもひ出られて、

いつの世のふもとの塵かふじの嶺を雪さへ高き山となしけん

〔空華日工集〕應安四年二月一日、大雪、午后掃雪登一覽亭、與諸公同時々雪晴、斜暉映遠岫、海水一帶碧色、遍界皆白、獨富士山不與他山同、蓋他山無雪、則此山獨白、今則諸峯皆白、此山獨青、余感云、賢士之處世也、通斤不與俗同、此山類焉乍見苔根山上、一點蒼烟如狗、須臾變白、杜陵之句不虛也、又來者楷朝與杭園哲東漂善現、恰是與藥山十禪客相似、